

農作物の小粋なネーミング

神村ふじを

老後の愉しみに家庭菜園という方も多いと思うが、私の周りも例に洩れず朝の早いうちから耕耘機だの草刈機だの何ともかまびすしい。

退職後は畑に走るか犬猫を飼うか二手に分かれる。畑組は機械を手に入れてせっせと作業に精を出す。使えるうちはまだいいのだが、年をとってきて機械に手を焼き、畑や作物に対する情が失せてくると、ボケ防止に指先を使う石を磨く作業などに没頭するようになる。ここで犬猫組と合流し、石に飽きてくると表面に変化のある木の切り株などを磨き始め、これにも飽きてくると大体お迎えが来るというパターンらしい。私はまだ農作業に未練があり、研磨作業に向かう気になれないが、あと十年も経つと何かを磨いているかもしれない。

私の家には親が残してくれた畑があり、その親も年をとって耕耘作業や消毒ができなくなった時期があったので、勤めに出ていたときから畑作業はしていた。私なりに知識はあったのだが、やはり人任せのところがあって、責任という意味においてはまったく他人事であった。「任される」というのと「しなければならぬ」という義務感とは、畑と向き合う姿勢がまったく違うかもしれないが、農作物を育てていると、ただけのことを姿で彼らが返してくれるので、教育という仕事に携わってきた関係上、子育てとはずいぶん違うものだとということに気付かされる。

春野菜、秋野菜と種苗を購入しなければならぬが、最近の種苗のネーミングの面白さと言ったらない。ネーミングでハツとさせられれば、即購入意欲に火が点くというもの。種苗業者にしてみれば、したり顔になっているに違いない。

「怪豆黒頭巾」という枝豆がある。黒豆と言えば晩生種の「丹波黒豆」が有名だが、こちらは白毛の中早生種で黒豆にならないうちに枝豆として収穫する。ネーミングが素晴らしい。愉快の域を超えて脱帽である。こういう名前を付けた人ってどんな人だろうと思ってしまふ。

サイインゲンに「さつきみどり」という品種がある。古い世代にとっては、「おひまなら来てよね」の五月みどりをすぐに思い浮かべてしまふ。濃緑筋なし丸莢のサイインゲンで柔らかく食感がたまらない。生姜醤油やマヨネーズでいただきながら、温泉芸者姿の五月みどりを思い出してしまふのは私だけではないだろう。こまつ菜の品種に「こまつみどり」があるということをつい最近知った。姉妹で種苗として登録されているのはおそらくこの二人だけなのではないだろうか。ちなみに五月みどりと小松みどりの母は、私の町からそう遠くない舟形町の出身である。

トウモロコシの「ゴールドラッシュ」は黄色の粒が先端までびっしり詰まった優良種で、「ゴールドラッシュ」とはよくその意を得たりと感心させられる。そのほか、大相撲から発想を得た白菜の「舞の海」。軽快な取り口の小兵力士の名前を何とも上手く使ったものである。本人には悪いが、九月場所で角番から全勝優勝を果たした「豪栄道」よりは美味しそうである。ジャガイモの「インカのめざめ」なんていうのも原種のことかと思うに寄せたロマンを感じるいいネーミングである。大根にもいい名前がないかどうかネットで検索していたら、「青大将二号」などという品種に出合ってしまった。これはあんまり食指が伸びないのだが……。

「ゆめぴりか」「青天の霹靂」「まっしぐら」は米のネーミング。北海道の「ゆめぴりか」は公募で選ばれたそうだが、「夢」とアイヌ語で「美しさ」を意味する「ピリカ」を組み合わせた愛らしい名前。ANAの国際線の機内食に採用されているらしい。「青天の霹靂」も「まっしぐら」も青森県の品種だが、熱帯生まれの米は北国でこそ花開いた感がある。

山形県の主力品種「はえぬき」。ブランド米「つや姫」が少しずつ幅を利かせつつあるが、栽培面積の六割を占めている優良品種だ。かつて、この「はえぬき」と同時に開発され世に出た「どまんなか」という品種がある。米沢の駅弁「牛肉どまんなか弁当」に今も使われていて駅弁はなかなかの人気である。だが、市場米としてはまったく見かけなくなってしまった。

公募ネーミングの「どまんなか」。決定に際して、「主婦が米屋に行って、『まんなか』とは言え

そうだが、『どまんなか』くださいと言えるのか」と県議会で話題になったことを思い出す。